「不信」の再考から科学への信頼を考える

KANG KIWON

大阪大学人間科学研究科

Trust (信頼) の対義語としての「不信」は、英語では一般に *mistrust* と *distrust* に大別される。両者は明確に区別されず混用されることも少なくないが、接頭辞の違いが示唆するように、後者の *distrust* はより強い拒否的な態度を含意し、積極的に「信じない」という姿勢に近いと考えられる。一方、前者の *mistrust* は「信頼の欠如 (lack of trust)」あるいは「信頼の保留 (suspension of trust)」といった、信頼がまだ形成されていない、あるいは形成に向けて逡巡している状態を指す傾向がある。

もちろん、信じる／信じないという二項対立で見れば、両者ともに「不信」と分類されるだろう。しかし、現実における「不信」への対処を考える際には、この違いを明確にすることが重要である。すなわち、不信の程度や性質に応じて、適切な介入方法が異なるためである。*Distrust* のような強い不信では、対象の言説に対して積極的な抵抗が生じやすく、単なる説得では効果が乏しい可能性が高い。この場合、報酬の提供や環境設定によるナッジといった、間接的な働きかけが有効な介入手段となりうる。これに対して、*mistrust* には、相手に対する信頼形成のプロセス自体が未熟な段階であるため、丁寧な情報提供や関係構築を通じた説得が奏功しやすいと考えられる。

とはいえ「不信」の意味が曖昧なのは、漢字文化圏に特有の問題でもない。実際、英語圏でも *mistrust* が信頼の欠如として用いられるケースは主流とは言い切れず、むしろ *distrust* とほぼ同義に使われる場合が少なくない。こうした概念の混同は、「不信」そのものを非合理的・感情的な態度として一括りに批難する傾向を助長し、議論が感情的対立へと発展するリスクを孕んでいる。

本発表のもう一つの重要な論点は「科学への信頼」の問題である。近年、ワクチン政策や環境問題など多様な文脈で科学への信頼が盛んに議論されているものの、その多くが「不信」が明確に定義されておらず、効果的な介入につながっていない印象を否めない。たとえば、ワクチン接種の必要性を「感じていない」といった形で現れる *mistrust* に対しては、科学的知識の提供や制度的信頼の可視化が有効かもしれない。一方で、「ワクチンは有害である」といった強固な信念に基づく *distrust* に対しては、言葉による説得はむしろ逆効果となり感情を刺激するおそれがあるが、このような区分は実際のワクチン政策においてあまり考慮がなされていないのが現状である。

以上の背景を踏まえ、本発表では以下の二点を提示する。第一に、「不信」に関する概念的区分を明確にすること。第二に、その区分が科学への信頼を考察する上でいかに有効かを示すことである。この枠組みを通じて、幾つかの実例を挙げながら、より精緻な信頼構築のための実践的視座を提示したい。